

サハリン 開発視察 報告書

主催団体： 北海道ラプターリサーチ

調査団代表

齊藤慶輔（北海道ラプターリサーチ 代表、猛禽類医学研究所 代表）

参加調査員

渡辺有希子（北海道ラプターリサーチ 事務局長、猛禽類医学研究所 副代表、
トドワーキンググループ）

阿部幹雄（イトウ研究家）

渡辺義昭（野鳥の会オホーツク支部）

調査日程：2006年8月13日～19日

13日 出国：千歳空港からサハリン・ユジノサハリンスクへ

14日 サハリン北東部ノグリキに到着、チャイボ・パイプライン敷設ルートの視察

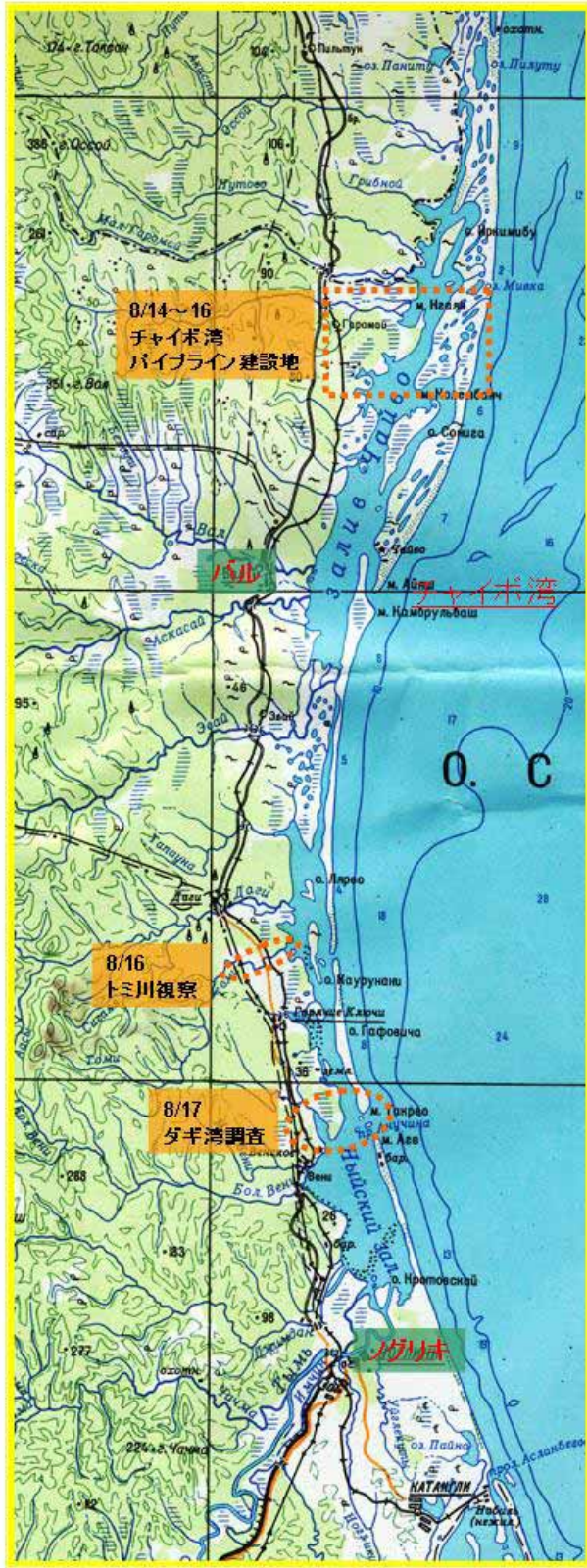
15日 チャイボ・パイプライン敷設ルート

16日 チャイボ湾に流入する河川の視察、近隣にオオワシの巣があるトミ川(ダギ湾近郊)
の視察

17日 ダギ湾の調査

18日 ノグリキからユジノサハリンスクへ移動

19日 帰国：ユジノサハリンスクから千歳空港へ



チャイボ湾

- ・ カラフトアオアシシギの生息が確認され、サハリンエナジー社（SEIC）が保全対象としている湿地に、大量の土砂流入が確認された。SEIC の主張では、並行して走っているエクソンのパイプラインの影響とのことであったが、SEIC のパイプライン予定ルートには既に、工事車両が沢を渡るための簡易道路ができており、同社の敷設工事も大きく影響していることは明らかである。なお、この河川について同社は、当地は小沢であり、サケ・マスが遡上しない河川は保全の対象とはならないと主張した。



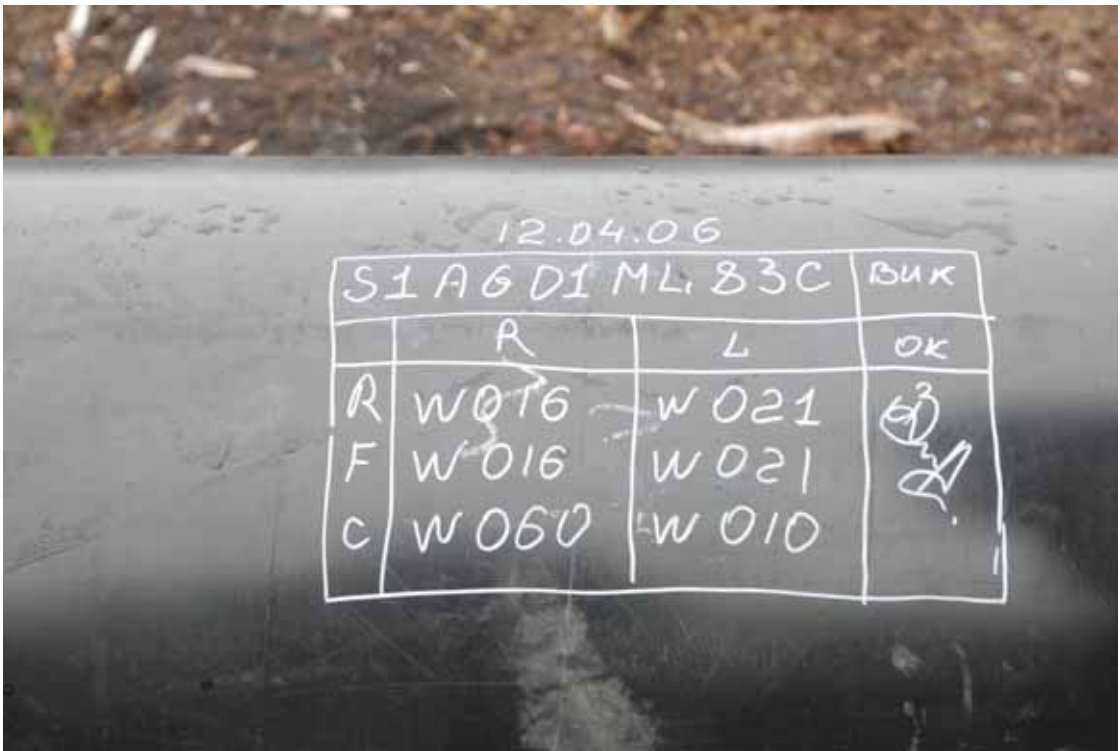


オオワシの今期営巣が確認されたため、冬期(SEIC の現地スタッフの話では 2006 年 3 月 15 日まで)に限定して行われることになっていた工事が、実際には 4 月 15 日まで 1 ヶ月間の期間延長されたという証言を現地の SEIC 職員(責任者格)から得た。SEIC のアドバイザーになっているマストロフ氏(オオワシ研究者)の了解を得たとしているが、SEIC が多数の専門家の調査結果を反映させて作成したと主張し、開発計画において最も遵守すべき“憲法”的存在であるはずの EIA(およびアデンダム)が、一研究者の意見でいとも簡単に覆り、開発が前倒しで推進されていることが判明した。

- ・ チャイボ湾対岸の砂嘴では、ほとんどのパイプライン敷設が終了していた。また、湿地帯や小湖沼群の水中に敷設されたパイプは、表面のコーティング処置を施されたのみであった。油漏れ事故に対する特別な策がなされている状況ではなかった。



- ・ 同湾の砂嘴に存在するオオワシの巣から約 300m しか離れていない場所にパイプラインの敷設が確認された。3 月 15 日以降、本種の影響緩和策として巣から 700m 以内での工事は一切行なわれていないと、SEIC の現地スタッフより説明を受けた。しかしながら、保全区域内のパイプライン 2 本(2 節)に記載された作業終了日の日付は 2006 年 4 月 12 日になっていた。(何れも 3 月中旬の古い日付表記の横に、新しく書き直されていた。)



- ・ チャイボ湾に近いパイプライン敷設地において、サケ・マスの遡上河川ではないとされる複数の沢で、湿原内への土砂の流入が認められた(一部対策が施されている沢も含む)。また、土砂の流出対策が施されていたサケ・マス遡上河川においても、現場職員は降雨のたびに遮蔽壁(布製)などの補修を行う必要があると明言していたことから、河川や湿原への土砂流出は極めて頻繁に発生しているものと推察される。





トミ川 (Tomi River)

- ・ ダギ湾に流れ込むトミ川河川横断部から約 100m の位置に、現在繁殖に使われているオオワシの巣を確認した (巣内に雛が最低 1 羽いることを確認した)。また、この繁殖巣とパイプラインを挟んで 100m 以内の場所に、同ペアの別巣を 1 つ認めた (同巣付近にとまる成鳥 1 羽も確認)。さらにそこから数百メートル遠方には、同ペアの第 3 巣である可能性が高い巣が 1 つ確認された。パイプラインがこのオオワシ繁殖ペアの占有領域 (繁殖のための重要なエリア) を二分していることが示唆される。繁殖地は広大な山火事跡に唯一残る河畔林で、当地以外の周辺地域に営巣に適した場所は極めて少ないと考えられる。さらに、極めて近接した複数の巣を確認したことから、同地域が以前より長年繁殖地として使用されていたことは明らかである。ルート計画時になぜ当地が回避されなかったのかは大きな疑問である。

オオワシの繁殖地であることを示す標識やバリケード (2 箇所) は、当地における他の人工物と比較して、著しく新しかった。事前に入手した現地情報によれば、本オオワシ繁殖地において、立ち入り制限を告知するための目立った標識やバリケード類が存在しない可能性があるとのことであった。今回認められた複数のバリケードや標識は、冬期工事中から継続して設置してあると、SEIC 現地担当者より説明を受けた。(なお今回、我々が当地の視察を希望する旨は事前に SEIC に対して伝達してあった。)



円内はオオワシの繁殖巣



円内はオオワシの巣

- ・ トミ川を横断するパイプラインの敷設工事は、冬期にほぼ終了しているが、河川横の拉致斜面において複数の土壌崩壊（エロージョン）と河川内への土砂の流入を認めた。オオワシの繁殖地に近いためにメンテナンスができないと、本社職員は言っていたが、そもそもオオワシの繁殖地にパイプラインを敷設したこと自体が原因となっている。このような事象が起こることは予測可能と思われ、本区域に対してどのような維持管理が計画されていたのかが興味深い。





開発事業が環境、特に野生生物に与える影響を回避・軽減させるためには、以下にあげる項目について、順次策を講ずるべきものである。

生息環境の保護：野生生物の重要な生息環境(繁殖地や採餌場、渡りのルートなど)と、生態系に悪影響を与える恐れのある開発現場との離隔を十分にとる

リスクの回避：油流出などの不測の事態に備え、(以外の場所においても) 慎重な開発区域の選定と十分な予防対策を講ずる必要がある。

開発による直接的な影響の軽減：開発地周辺に生息する野生生物への影響を可能な限り軽減させるため、工事の時期や工法などを工夫する

現地の状況を見る限り、本来計画段階で実施され、最も重視されるべき 、 の対策が十分施されたとは判断しがたい。チャイボ湾周辺は、国際的な希少種を含む多くの鳥類が生息する。また、沿岸地域には多数の糸状湖や広大な高層湿原など、極めて脆弱な地形が存在する。このことから、油流失事故の際に重篤な環境汚染が発生するリスクが極めて高い。チャイボ湾周辺はパイプライン敷設ルートとして、本来回避すべき環境であったと考える。

現在遂行中の開発において講じられている環境影響緩和策は に終始している。また、開発を前倒しで進めようとしているのではないかと思われる事象が多数確認されたことから、SEIC は環境配慮よりも事業の加速化を重んじているように見受けられる。

2006年8月20日

調査団代表 北海道ラプターリサーチ・猛禽類医学研究所 齊藤慶輔

Steller's Sea Eagles nests

- Active
- Occupied
- Unoccupied

○ SSE Nest 700m buffer

○ SSE Nest 350m buffer

Spotted Greenshank nesting

▨ Potential Spotted Greenshank nesting habitat

SEIC Construction

- Pipeline KPs
- Pipeline Route

